

「御天守御修復ノ儀ハ日々心付、大破ニ及バザル様ニ致スベク候」

城は白いから“しろ”というのは、本当なの？

姫路である「城郭研究者」の講演があったそうです。「城は白いから“しろ”なんです」と話されたらしく、聴衆のひとりとその事実確認に来られたことがありました。その方の講演を聞いたわけでもないし、根拠がわからないので「黒い城でも“しろ”と言ったしねえ。『城』は古代から“しろ”と訓読みしてたわけだから、『城』を“ぎ”とか“じょう”とか読んだ意味こそ、のほろが…ねえ」なんてはぐらかしたことがあります。俗説でしょうが、姫路城を講じて、聴衆を喜ばすためのリップサービスだったのでしょうか。確かに姫路城の白さは、「美」という形容詞で語られることが多いし、そうだとも思います。

美しくあるためには人間でもいろいろと「努力」が必要です。エステ、高級化粧品、サプリメント、美容整形…お金も手間もかかります。姫路城でも事情は変わりません。いろいろと「努力」が必要です。

そこで本号では、「努力」の現場について紹介します。



◆ 天守大千鳥（東面）にある補習用の出入口（○印）。江戸時代においても当然、守の屋根や壁面の補修は実施されており、その際、室内から外部への出入り口が必要であった。ほかにも千鳥破風内の格子窓が扉になっている箇所もある。口の渡槽2階では、格子を外して1階の屋根に降りられるようになっている。



屋根において古くなった屋根目地を掻き落としている様子。◆ 大きな表面積をもつ天守曲輪の建物群、それらすべての屋根目地を塗り替えるだけでも相当な仕事量となる。姫路城ではほとんどの屋根で目地に漆喰が塗られているので、その補修となると、建物がある限り永々と作業が続くことになる。壁の漆喰も含めて、これだけまとまった伝統的な漆喰塗りの仕事があるのは、日本国内ではいまや京都と姫路くらいらしい。



ここ数年、姫路城の天守曲輪には鉄骨の足場が組まれており、写真家泣かせとなっています。これは漆喰の塗り直し作業が進められているため、数年にわたる修理工事です。本号で紹介している写真は乾小天守における作業の様子です。この檜では壁面に浮きが見られており、その部分の漆喰を掻き落としたところ（写真左）、内部にかなり水分がしみ込んでいたことがわかりました。浸透した水分は一部の木舞を腐らせていたのです（写真下）。素人眼には木舞の間に押し込まれている壁土の密度が小さいように見えました。たしかにもっとぎっしりと詰まっていたしかるべき箇所とのことですが、昔の担当者が手を抜いたのか、腕の悪い職人が担当したのかわかりません。雑な仕事をしている、ということでした。



▼木舞を組んでいるところ



酒井家は姫路に入封すると、諸役人の勤方心得を触れ出しました（寛延3<1750>年2月）。

一、此許は 御城向大ク候故御作事之場所甚多候、殊ニ去年以来は別而大善請共ニ候間、御修覆元方ハ不及申立合中目付小奉行共随分遠熟談、御為ニ可罷成儀ハ少も所存を不残申談、竹木鉄物等御買上之節は入札念入其品之善悪綱ク可吟味候、商売之致方も前橋とは違候間、心付可有之事ニ候、（中略）御天守御修覆之儀は日々心付不及大破様可致候、白土等表向斗心付不申第一石垣等ニ緩ミ有之候哉毎度相廻可致吟味候旨被 仰出候 ※

城代や留守居への心得にも同様の文言がみられます。この頃の修理は「白土等表向斗心付不申」とあるので、漆喰など外見上の手入れが主だったのではないのでしょうか。姫路は中国・西国への主要往還が通じているため、よろしくない風聞が上方だけではなく江戸にまで伝わりやすいと家中では認識されていたので、外観上目立つ部分ばかりに注意が払われたのは当然でしょう。天守は目立ちますから、それが「大破」したとなれば一大事です。しかし「第一石垣等ニ緩ミ有之候哉毎度相廻可致吟味候」ともあることに注目すると、この時期、建物ばかりでなく、その基礎ともなっている石垣にも傷みが目立ちはじめたのでしょうか。そのため姫路城天守などの建築物の中には、「大破」になりかねない構造上の問題を抱えた箇所もあったのかもしれない。宝暦4（1754）年に大天守水改が行われたことが、それを示唆しているように思われます。あるいは、前橋城では石垣の補修にそれほど労力を割かず済んでいたのに、姫路に来てみると大きな手間になったことで神経質になっていたのでしょうか。いずれにしても「御城向大ク候故御作事之場所甚多候」一担当役人の本音は、「こんな大きな城じゃ、大変だ!」というところではなかったのでしょうか。

※『姫路市史』第十巻史料編近世1所収



"Shiro Fumi" No.30 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.